

東京都心部のパブリックスペースにおける人の流れと溜まりの考察
ー東京国際フォーラムと大丸有エリアを事例としてー

宇野研究室

4106088 村松 秀美

1. 研究背景と目的

日本最大のオフィス街である大丸有エリア^{註1)}は高層ビルが建ち並び、高密度化や地下利用により建物の機能が複雑化している。そのような高層ビル群の隙間にある地上広場などのパブリックスペースはビジネスマンの憩いの場である。東京国際フォーラム（以下TIF）^{註2)}も地上広場を設けており、エリア内最大^{註3)}のオアシスとなっている。そこでTIFに焦点を絞り、パブリックスペースの空間構成が利用者の行動（流れと溜まり）をどのように操作しているかを考察し、利用者にとって、また大丸有エリアにおいて、TIFの存在の重要性と機能性を検証する。

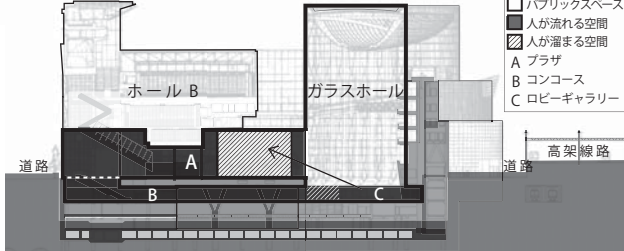
2. 研究方法

- 1) 現地調査（デジタルカメラ撮影）をもとに現状を把握。
- 2) 文献調査及び設計者側へのヒアリング調査をもとにTIFの設計意図を把握し、現状と比較。

1) は利用者側から、2) は設計者側から分析する。

3. 対象地概要（図1-図3）

もとは東京都庁があった敷地に建つTIFは、西に4つの劇場ホール、東にガラスホール、中央にプラザという地上広場がある。地下1階にはコンコースやロビーギャラリーなどがあり、この階にてTIFはJR東京駅と東京メトロ有楽町駅に直結している^{註4)}。



▲図1 TIF東西断面図

▼表1 プラザの時系列的変化

時刻 日時	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	説明
5/23(土)															M1→M2→M3→M1→M3→M1。14時と18時にM3が見られた。コンサート開演前はロビー空間と多くの利用者が集まるため溜まり空間が発生していた。
6/15(月)															M1→M2→M1→M3→M1。14時にカフェテリア空間が消えその後3時間静かになっていった。18時から急激にM3が始まり一気に溜まりの空間になったのが特徴的。
7/29(水)															7/31から行われるイベントの会場確保がありプラザの機能が立入禁止に。M1とM2は見られなくなったがM3は見られなかった。溜まりの空間がなくなった。
8/04(火)															M1→M2→M1。この日はイベントは行われずM3が見られなかった。M3がプラザにのみならず影響を及ぼしている。
9/14(月)															M1→M2→M1→M3→M1。17時からロビーへ変わり利用者の溜まり空間へ。20時は開演と同時に溢れ出て来て溜す空間へと機能を変えていた。
7/5(日)															9時から急激に開かれ16時までM4が見られた。また日曜日であったため22時に閉店を繰り返して見られ、終日多くの人で賑わっていた。
10/23(金)															18時からM4が見られた。当日開催されたオアシスイベントは約500席用紙された席が満席になると、周辺の賑わいが生じていた。
利用エリア	M1道・休憩所 M2カフェテリア M3ロビー M4イベント会場 歩行者の動線 利用されている領域														■プラザには4つのモードがある。 ■モードは時系列的に変化し、基本的にM1→M2→M1、イベントがあるとM3が、休日はM4が見られる。 ■M2,M3,M4で溜まる人々の分布が異なる。

4. TIFにおける人の流れと溜まり

4-1. TIFの地上空間において

4-1-1. プラザの観測（表1）

利用者の多様な活動を可能にさせる機能はプラザが担っていることを明らかにするため、9時から22時の間、7日間に渡り調査した。プラザ内で変化が見られた箇所における人々の行動観測し、空間用途を考察した。

4-1-2. 観測結果

プラザの用途変化は2つの特徴があることがわかった。

1) モードの種類:M1～M4の4つのモードがある。M1(道・休憩所)、M2(カフェテリア)、M3(ロビー)、M4(イベント会場)として利用される。

2) モードの時系列的变化: 通常はM1→M2→M1と変化し、ホールでイベントが開催される日は単発的にM3が見られる。プラザで1日中イベントを行う日はM4となる。

4-2. TIFの地下空間において

4-2-1. コンコース、ロビーギャラリーの分析（図3）

地下のパブリックスペースに注目すべく、地下1階のコンコースとロビーギャラリーを分析する。

1) コンコース: 地下鉄有楽町線とJR京葉線を結ぶ通路であり、主に電車を乗り換える人々に利用される。

2) ロビーギャラリー: 通常はA～Dの4つのホールの総合ロビーであり、一時的にギャラリーとして使用するこ

▲図2 TIF地上平面図

▲図3 TIF地下1階平面図

とがある。地上11階までの吹抜空間で、かつプラザに面した壁が全面ガラスであることから、外部要素を取り込み、地上と地下が視覚的に連結している。

4-2-2. TIFから周辺へ延びる地下通路（図4、表2）

コンコースとロビーギャラリーから延びる地下通路は大丸有エリア全体に張り巡らされている^{註5)}。その地下通路は空間構成別にT1～T5の5つのタイプに分類できる。

4-3. 考察

[考察1] プラザがM1の時、ビジネスマンらがオフィスへ向かう最短の道として利用し止めどなく流れている。一方M2～M4の時はTIF利用者がある一定時間溜まるため賑わいを見せている（表1）。またM2～M4の時、利用者はプラザ中央に生えるケヤキゾーン（図1A斜線部分）に溜まるため、その両サイドは自然と空けられ、道としての動線が常に確保された状態となっている。

[考察2] ロビーギャラリーはホールの開場を待つ利用者を溜めるために設けられた大空間だが、大半の利用者はプラザをロビーとして利用することがわかった。よってここは主にJR有楽町駅（地上）とJR東京駅（地下）間の乗換通路として人々を流す機能を果たしている。またロビーギャラリーはT1に属する唯一の空間で、大丸有エリア内で最も地上と連結している地下空間と言える。

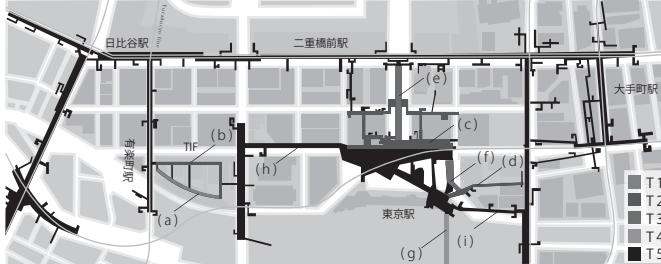
[考察3] TIFはプラザとロビーギャラリーで人の流れと溜まりが共存している。また、プラザは主に溜まる空間として、ロビーギャラリーでは主に流れる空間として利用されている。大丸有エリアの地下に交通ネットワークが張り巡らされていることも相まって、人々は地上で溜まり、地下で流れるという行動が発生したと考える。

5. 設計意図と現状の比較

5-1. ヒアリング（図5）

大丸有エリアにおけるTIFのポジションを把握するため、設計に携わっていた佐藤尚巳氏^{註6)}にヒアリング調査を行った。その内容を抜粋し以下記す。

「誰でも利用してほしいという意識から3つの工夫を行った。まず地上広場を設け、ビジネスマンが行き交う道として便利かつ公園のように憩える事を目的とした。



▲図4 大丸有エリア地下通路マップ

▼表2 地下空間の構成表

項目	建物	地上	タイプ	空間構成 ダイアグラム	空間認知 ダイアグラム	説明	場所	写真
大丸有エリアの地下空間	連結	見える	T1			地下と地上が建物内で視覚的に繋がって一体となった空間として認知できる。	総合ロビー(a)	(a)
		見えない	T2			地下において地上への視線の抜けは生じないため3つの空間に分かれて認知される。	地下コンコース(b)、丸ビル・新丸ビル前(c)、オアシス(d)	(c)
	独立	要素アリ	T3			丸の内歴史の内容などを展示し、街との繋がりを意識し活用している。	行幸地下ギャラリー(e)、オアシス前(f)	(f)
		要素ナシ	T4			地下に独立し地上とは異なる発展をした空間。	エキナカ(g)	(g)
			T5			地上へ出るため、また乗り換えのために機能面重視で作られた地下通路。回遊性はない。	丸の内自由通路(h)、東西線乗換通路(i)	(i)

次にロビーギャラリーで溜まる利用者にとって快適であるために、地上のように開放的な空間にした。最後にパブリックスペースを大きくするため地上から地下まで立体的に構成した。」「今ではプラザが最も重要で、機能しており、民営化^{註7)}後により一層活動の幅が広がった。」

5-2. 設計意図と現状の相違点の考察

[考察4] プラザの動線は設計当初から、流れと溜まりが分かれるよう意図的に計画された。その計画通りに流れるゾーンと滞まるゾーンが発生している（図6）。

[考察5] パブリックスペースの空間認知拡大を目的とし地上と地下の可視化が図られたことで、パブリックスペースの立体的な構成が生まれた。また、考察2で述べたような現象が起きたのは、考察3と考察5が理由として挙げられると考えられる（図7）。

[考察6] TIFが民営化したことで法律上活動が制限されていたプラザがイベント会場として利用可能になった。よって利用者の活動の幅が広がり、一層集客力を持った。その後仲通りの改修や新丸ビルの竣工などの商空間化が進み、大丸有エリア全体で集客力を上げている（図5）。

6. 結論

本研究により以下の3つを結論として述べる。

- ・TIFには、様々な目的のもと多くの人々が集まり、フレキシブルなプラザが彼らの共存を可能にしている。
- ・TIFで人々を溜め、大丸有エリア全体へ流している。
- ・エリア内ではT5に属する空間が最も多く、T1はTIFのロビーギャラリーのみである（図4、図7、図8）。

ロビー、イベント会場、都会のオアシスとして大量の人々を受け入れているTIFは、彼らをプラザに溜めエリア全体へ送り出し、街のポンプの様な存在と言える。またエリア全体の地下通路は動線処理機能を果たしているが、T5（乗換に利用される独立した地下空間）が多く地上との繋がりに際して改善する余地がある。そこでエリア内にT1（地上と視覚的に繋がる地下空間）を増やしパブリックスペースを立体化を図りTIFの様なポンプとなり得る建物を増やせば、地下における地上の不透明さを解消し、人の流れを制御することができるのではないかな。



▲図5 大丸有エリア地上マップ



▲図6 プラザの空間構成

▲図7 T1

▲図8 T5

脚注: 註1. 大手町、丸の内、有楽町の3つを含めたエリアのこと。註2. 建築家ラファエル・ヴィニオリ設計の国際的なコンベンション&アートセンター。註3. 総面積は約9700㎡で立木が59本植わっている。註4. プラザ、コンコース、ロビーギャラリーはビジネスマン等が年間2000万人行き交う主要な動線となっている。註5. エリア内で13駅20路線が利用可能。註6. 元ラファエル・ヴィニオリ日本事務所所長の佐藤尚巳氏のヒアリング調査。註7. 1991.01.10～H15.06.30は㈱東京国際交流財団、H15.07.01～は㈱東京国際フォーラムとなった。参考文献: 1) 東京都生活文化局『東京国際フォーラム-構想から開館まで-』東京都1996年2) 『GA JAPAN 22』A.D.A EDITA Tokyo 1996年3) 社団法人新日本建築家協会『東京国際フォーラム設計競技応募作品集』1990年4) 早稲田大学渡辺仁史研究室『行動をデザインする』彰国社2009年5) 建築思潮研究所『建築設計資料4 オフィスビル』建築資料研究